

# 中世における動詞句の変遷に関する一考察

——「肝ヲ消ス」を中心として——

青 木 毅

## 目次

- 一 はじめに
- 二 延慶本『平家物語』における「肝ヲ消ス」の意味——問題の所在——
- 三 延慶本『平家物語』における「肝ヲツプス」「魂ヲ消ス」の意味
- 四 「肝消ユ」と「肝ヲ消ス」
- 五 「肝ツプル」と「肝ヲツプス」
- 六 「魂消ユ」と「魂ヲ消ス」
- 七 まとめ——「肝ヲ消ス」の成立——
- 八 おわりに

## 一 はじめに

本稿に言う「動詞句」とは、へ名詞一語と動詞一語とが、その名詞と動詞との文法的関係を示す助詞を介して結びつき、全体としてあるまとまった意味を表す語連続のこと指着している。筆者は、日本語史研究のあり方の一つとして、こ

中世における動詞句の変遷に関する一考察

の「動詞句」なるものを日本語の単位として設定し、その分析を通して日本語史上の問題点をあぶり出すという試みを行なってきた。<sup>(1)</sup> その意図は、「句」という単位は、「語」にくらべて、日本語における過去の表現の継承と新しい表現の生成という営みを、より明確に映し出すのではないかと考えるところにある。すなわち、「語」単独ではなく「語」の組み合わせに注目することによって、日本語史における不変・変化の両面をより客観的かつ動的に捉えることが可能となるのではないかと期待するものである。

そのような意図のもと、本稿では、鎌倉時代以降文献上に用例の認められる「肝ヲ消ス」という動詞句を中心として、その成立にかかわる諸問題について検討を加えてみたい。

## 二 延慶本「平家物語」における「肝ヲ消ス」の意味——問題の所在——

延慶本『平家物語』<sup>(2)</sup>においては、「肝ヲ消ス」は全五例用いられているが、その意味は二ないし三種に区別することができるように思われる。まず、これは現代共通語では失われている意味であるが、(a)〈悲しみや寂しさなどのために、茫然自失となる〉意(一例)が認められる。

①此ハ海漫々トシテ眼雲路ニ疲レバ、三界広ト云ドモ安キ所モナク、神明仏陀ノ恵モナケレバ、哀ト云人モナシ。曙

モ晩モ肝ヲケシ心ヲ尽スヨリ外ノ事ナシ。(第六本、五六ウ<sup>(3)</sup>)

これは、壇浦で心ならずも助け上げられ命を長らえている建礼門院が、死んでいった平家の人々のことを偲びながら、悲しみに暮れている場面で用いられた例である。

残りの四例は、現代共通語の場合と近い意味で用いられたものであるが、細かく分ければ、(b)〈恐れや不安などのために、生きた心地のしない状態になる〉意(三例)と、(c)〈意外な事態に、心臓が止まりそうになるほどびつくりする〉意(一例)との二種を区別することが可能であろうと思われる。

(b)の意の例としては、次などがある。

②道スガラ駒ヲ早ムル人アレバ、「我頸ヲ打ムズルヤラム」ト心ヲ尽シ、傍ニサ、ヤク者アレバ、「只今カ」ト肝ヲケス。(第六末、三五オ⑨)

これは、平維盛の子六代が、北条時政に連行されて鎌倉へ向かう道すがら、今にも殺されるのではないかとおびえながら明かし暮らしているという文脈で用いられた例である。

(c)の意の例としては、次の一例がある。

③サテ夜漸暁方ニ成テ、源氏ノ方ヨリ廿万六千余騎、声ヲ調テ、時ヲ作事三ヶ度也。凡東八ヶ国ヒ、カシテ、山ノカセギ、河鱗ニ至マデ、肝ヲケシ、心ヲ迷ワサズト云事ナシ。(第二末、九六オ①)

これは、富士川の合戦において、臆病風に吹かれた平家が、水鳥の羽音を源氏の襲来と信じて逃亡し、それと知らぬ源氏が、翌朝鬨の声を挙げて平家方へ攻め入ろうとする場面で用いられた例である。大地を揺るがすほどの源氏の鬨の声に、山の鹿や河の魚までもがびっくりしたの意であると思われる。

右のように、延慶本『平家物語』における「肝ヲ消ス」は、三種の意味を区別することができると思われるが、それら(a)(b)(c)の意味には、へある精神的衝撃(ショック)を受けて、正気を失った状態になるという共通の意義特徴を認めることができると思われる。とすれば、一つの可能性としては、「肝ヲ消ス」の意味はもともと一つであったが、次第に二つ三つと意味を派生させていったのかとも考えられなくはない。ところが、今回の調査では、延慶本『平家物語』より前(以下、「延慶本『平家物語』以前」と表記する)に成立した諸文献には、一例も用例を見出すことができなかったのである。もちろん、さらに詳しく調査をすれば、延慶本『平家物語』以前の文献にも用例を見出すことができるかもしれないが、右に述べた使用状況からすれば、現段階では、「肝ヲ消ス」が次第に意味を派生させていったという見方は、事実には合わないと言わざるを得ないことになる。

もし、「肝ヲ消ス」が、延慶本『平家物語』以前に全くあるいはほとんど用いられていないとすれば、なぜ、延慶本『平家物語』に（あるいは、鎌倉時代になって、と言うべきか）突如として、三つの意味を有する「肝ヲ消ス」が現れたのであるのか。

この問題を解明するためには、「肝ヲ消ス」と形態上・意味上の類似点を有する「類義動詞句」との関係を検討する必要があるように思われる。本稿では、次の諸条件をすべて満たすものを「肝ヲ消ス」の類義動詞句と認め、検討の対象とする。

- (1) 名詞（單純語）＋「ヲ」＋動詞（單純語）という構成を有する。
- (2) 名詞「肝（キモ）」または動詞「消（ケ）ス」を含む。
- (3) (a)または(b)または(c)の意味を持つ。
- (4) 延慶本『平家物語』以前に用例が見出される。

右の条件を満たし、さらに、延慶本『平家物語』とそれ以前の諸文献に併せて五例以上の用例が見出された、「肝ヲ消ス」と「魂ヲ消ス」とを「肝ヲ消ス」の類義動詞句として取り上げ、以下、相互の関係について検討を加えることとする。

ところで、これらの動詞句は、動詞部分が他動詞（以下、他動詞句または他動詞句形と称する）であるが、一方で、名詞＋自動詞という構成を有する「肝消ユ」「肝ツブル」「魂消ユ」という句形（以下、自動詞句または自動詞句形と称する）も見出される。「肝ヲ消ス」の成立の問題を考察する上で、「肝消ユ」は無視できない存在であると思われるので、これら自動詞句形との関係も考慮しながら考察を進めることとする。

なお、延慶本『平家物語』には、「肝消ユ」は一例も用いられていない。

### 三 延慶本『平家物語』における「肝ヲツプス」「魂ヲ消ス」の意味

「肝ヲツプス」は、延慶本『平家物語』に全三例見出されるが、(a)の意はなく、(b)の意二例、(c)の意一例が存する。

(b) へ恐れや不安などのために、生きた心地のしない状態になる意の例

① 万人皆怪ヲナス処ニ、將軍塚鳴動スル事、一時ノ内ニ三反也。五畿七道コト々ク肝ヲツプシ、耳ヲ驚サズト云事ナシ。(第二本、七六ウ③)

これは、大地震によつて国中の人々が恐ろしさのあまり生きた心地のしない状態になっているさまを表している例である。

(c) へ意外な事態に、心臓が止まりそうになるほどびっくりする意の例

② 十七日ノ朝、大政入道ノ門ノ前ニ札ヲ書テ立タリケリ。「山門ノ大衆、高倉宮ノ御語ヲ得テ、平家ノ一門ヲ追討ノ為ニ、京へ打入ムトス」ト云事也。(中略)宮ヲサテ置奉レバコソ、加様ニ虚事ヲモ云ヒ出シ、我等モ肝ヲツプス事ナレ。(第二中、二六ウ⑦)

これは、高倉宮の謀反の報が都に届いた直後、何者かによつて、へ山門の大衆が高倉宮の説得によつて平家追討のために京へ攻め入ろうとしているという、偽りの内容を記した立て札が立てられたため、平家一門がびっくりして大騒ぎをしたという文脈で用いられた例である。

「肝ヲ消ス」との明確な差異は、(a)の意がない点である。

一方、「魂ヲ消ス」は、延慶本『平家物語』に全十一例見出されるが、(a)の意二例、(b)の意九例で、(c)の意は認められない。

(a) 〈悲しみや寂しさなどのために、茫然自失となる〉意の例

①三尊来迎ノ道場ニ望メバ、香煙ノミ空ニ聳テ、公ハ何ンカ去リマシマス。花顔忍辱ノ御衣ヲミ奉ルダニモ、十善ノ御姿眼ニ遮テ涙紅也。適マ柔和ノ御音ヲ聞ダニモ、一旦ノ別離耳ニ留テ魂ヲ消ス。(第六本、六一ウ①)

これは、建礼門院が今は亡き高倉院を偲びつつ、悲しみの涙にくれ寂しさに心が消え入りそうになっているさまを表している例である。

ところで、(a)の意のもう一つの例は、「延暦寺衆徒等解 請院庁裁事」という解状(解文)の中に用いられたものである。

②我山仏法、將以滅之逃也。汰而有余<sup>(イ)</sup>。仰蒼天ニ而押涙<sup>(イ)</sup>。悲而何為。丘シテ中丹ニ銷ス魂<sup>(イ)</sup>。(第一本、七八オ⑥)

この解状は、鳥羽院の時代に越前国の平泉寺が園城寺の末寺にされるとのうわさが立ち、延暦寺の衆徒が大騒ぎをして訴え出た時のものである。

「肝ヲ消ス」「肝ヲツ布斯」「魂ヲ消ス」のうち、このような漢文体の文章に用いられた例は、延慶本『平家物語』の中では、「魂ヲ消ス」の(a)の意の例のみである。このことは、「魂ヲ消ス」の出自や他の類義動詞句も含めた(a)の意の源泉を探る上で、大きな手がかりとなろう。また、「ケス」の表記が「銷」字となっている点にも注意しておきたい(以下の挙例に見られるように、「ケス」の表記が「銷」字となっている例は、漢文体の文章にしか現れていない)。

(b) 〈恐れや不安などのために、生きた心地のしない状態になる〉意の例

③九日午時計ニ大地振ラビタ、シクシテ良久シ。畏シナンドモナノメナラズ。(中略)天闇シテ日ノ光モ不見。地響テ巖谷ニ躡入レリ。老少共ニ魂ヲケシ、鳥獸モ悉ク心ヲ迷ス。(第六末、二オ⑧)

これは、「肝ヲツ布斯」の用例①と同様、大地震によって老いも若きも恐れおののいている場面に用いられた例である。「肝ヲ消ス」との明確な差異は、(c)の意がない点である。

ところで、「タマシヒ」の表記には、「魂」字のほか「神」字が用いられる場合もあるが、意味・用法に明確な差異を認めがたいため、一括して扱うこととする(ただし、「神」字が、(b)の意に限って用いられ、(a)の意には用いられないことについては、出自との関連で必然性があるとも考えられる)。

④或時八富士川大井川ニテ飢ニ臨テ命ヲ失ムトスル事モアリ。或時八宇津山高志山ニテ山賊ニ合テ神ヲケス事モ度々也。(第六末、三二ウ④)

本稿における地の文での表記は「魂ヲ消ス」に統一して記すこととする。

なお、自動詞句形の「肝ツブル」「魂消ユ」は、延慶本『平家物語』には一例も用いられていない。

延慶本『平家物語』以前の諸文献における「肝ヲ消ス」「肝ヲツブル」「魂ヲ消ス」の関係を検討するに先立つて、次に、自動詞句形と他動詞句形との関係を確認しておきたい。

#### 四 「肝消ユ」と「肝ヲ消ス」

二で述べたように、今回の調査では、「肝ヲ消ス」は、延慶本『平家物語』以前の諸文献には見出されなかった。それに対して、「肝消ユ」は、『竹取物語』(一例)を初出として、『古今和歌六帖』(一例)『浜松中納言物語』(二例)に用いられている。

①竹取の翁、「この工匠たくみらが申まをことは、何事なにぞ」と、かたぶきををり。御子は、われにもあらぬ気色けしきにて、肝消えぬ給へり。(『竹取物語』、蓬菜の玉の枝、新大系・二三①)

②むかひみてそむくほどだにきもきえてなげきしものを月のへにける(『古今和歌六帖』第五、二七六九、「いけのうへの大君」)

③「今は」といふかひなく思おもひ立たはてぬるを、いとなつかしうの給たまはせつる御みけはひありさま、耳みみにつき心こころにしみて、

肝消え惑ひ、さらに物おぼえ給はず。〔浜松中納言物語〕巻の一、大系・二二二③)

④御門みゆきしたまひ、中納言もつかうまつり給へるを見たてまつらんと、とをき國の人へさへ残りなくつどひて、かたちありさま見るに、肝消えて思はぬなく、をよぶまじきはやまひになりぬべく、我はと思ふ人へぞ、(中略)心をかけて思はぬはなかりける。〔浜松中納言物語〕巻の一、大系・一五八④)

①は、くらもちの御子の持つて来た蓬萊の玉の枝が、宮中の工人の手によって作られたにせ物であったことが、工人たちの訴えによって露頭してしまう場面である。「われにもあらぬ気色にて」とあることから、御子がショックのあまり茫然自失となっている様子を表していると考えられ、(a)に近い意で用いられた例と言えよう。②も、「なげきしものを」とあることから、(a)の意で用いられたものと見られる。③は、中納言が后との別れに際して、悲しみのあまり思考停止の状態になっている場面であるから、やはり、(a)の意で用いられた例と判断される。④は、中納言を一目見ようと遠国からも人々が集まり、中納言の美しさにびっくりして思いを寄せない女性はいなかったという文脈として解釈できようか。とすれば、(c)の意で用いられた例ということになる(ただし、中納言の美しさに茫然として)のように解釈できるとすれば、(a)の意に近いと言えなくもない)。

右のような理解が妥当であるとすれば、「肝消ユ」は、元来(a)の意であったが、平安時代後期成立とされる『浜松中納言物語』に至って、(c)の意でも用いられるようになったものと考えられる。このように、「肝消ユ」は「肝ヲ消ス」に先行して文献上に現れており、(a)と(c)の意味を共通に有しているのである。このことから、「肝ヲ消ス」は、「肝消ユ」を母体として派生的に生じた句形であると思ふことができのではないだろうか。

ただし、「肝消ユ」の最後の例(『浜松中納言物語』)から「肝ヲ消ス」の最初の例(延慶本『平家物語』)までの間に、およそ二百年もの空白期間があることを考えれば、「肝ヲ消ス」は、自然推移的に生じたと見るよりも、何らかの言語的要因がきっかけとなって生じたと見るべきかもしれない。この点については、他の類義動詞句の使用状況を概観した後で

改めて考えたい。

## 五 「肝ツブス」と「肝ヲツブス」

「肝ヲツブス」は、延慶本『平家物語』以前にすでに、『今昔物語集』（二例）『宝物集』（二例）『十訓抄』（二例）『保元物語』（二例）において用いられている。

①物モ不思議ニテ臥タレバ、湯ヲ口ニ入ルレドモ、齒ヲヒシト咋合セテ不入レズ、身ヲ搜レバ、火ノ様ニ温タリ。妻子此レヲ見テ、

肝ヲツブシテ、「奇異」ト思フ程ニ、（『今昔物語集』卷第二十八、第三十二、大系・四一〇六⑬）

②公 佛天ニヲソレ臣ハ龍顔ニヲソレタテマツレル天變地振スレハキモラツフシカラスナキハリアツマレハアヤシ

ミヲナス（書陵部本『宝物集』、二二ウ⑧）

③「争カカハカリノ信者ヲハタフロカスソ」トテ、我等ヲサイナミ給ヘル間、雇集タリツル法師原モ、カラキ肝ツブ

シテ逃去ヌ。（『十訓抄』上、「第一可施人惠事」第七話、索引・上二一九⑤）

④「首藤九郎是みよ。家季、中差にて下野殿を射落奉らんと思へども、旁 存る旨あれば、疵はつけ申さじ。矢風

計をひかせ奉りて、肝をつぶさせ申さん。」とて、（『保元物語』中、「白河殿攻め落す事」、大系・一〇九⑭）

⑤「いかなる天魔の所行にて、人の肝をつぶすらむ。」とぞ申あへる。（『保元物語』下、「新院讃州に御遷幸の事」、大系・

一六四⑯）

①は、蛇を異常に怖がる三善春家が、間近で蛇を見てしまったために、腰を抜かしながら家に逃げ帰り、そのまま氣絶してしまつた場面である。湯を飲ませようとしても、硬直したように齒をくい合せているので飲ませられず、体に触つてみると、まるで火を懷いたように熱くなつており、「奇異（アサマシ）」と思つたわけであるから、（c）の意で用いられていると見られる。②は、「天變地振スレハ」とあることから、延慶本『平家物語』における「肝ヲツブス」の用例

①と同様、(b)の意を表していると判断される。③は、命を助けられた古鷹が、老法師に姿を変えて、助けてくれた僧に望みを一つ叶えてやろうとしたが、僧が老法師とのある約束をうっかり違えてしまったために、老法師の試みが失敗し、護法天童の叱責を蒙る結果となり、雇い集めた法師らもびつくりして逃げてしまったという文脈であるから、(c)の意であると見られる。④は、矢を命中させずに、相手をかすめるように射ることで、脅かしてやろうという文脈であるから、(b)の意を表していると判断される。⑤は、崇徳上皇が讃岐国へ遷幸するために都を出発したところ、都では不思議な出来事が起こっていたが、それはどんな天魔のしわざであろうかという文脈である。不思議な出来事とは、源氏左馬頭義朝と播磨守清盛とが合戦をするとうわさが流れ、都中が大騒ぎになったことを指していることから、この場合は、(b)の意で用いられていると見られる。

このように、「肝ラツプス」は、延慶本『平家物語』以前においても、延慶本と同様、(b)または(c)の意で用いられている。

一方、「肝ツプル」は、「肝ラツプス」の初出である『今昔物語集』よりさらに前の『源氏物語』に一例用いられている。

- ⑥あなむくつけや(中略)よからぬことをひきいてたまへらましかはすへて身にはかなしくいみしとおもひきこゆとも  
又みたてまつらさらましなといひかはす事ともにいと心もきもつふれぬ(『源氏物語』、「うき舟」、大成・一九〇四)

③ これは、浮舟の母中将の君が弁の尼との会話の中で、「もし浮舟が匂宮と不倫の関係に陥ったなら、もう二度と(浮舟と)会うことはないだろう」と話していたのを、浮舟が聞いてショックを受けている場面であり、(b)の意で用いられた例と見られる。(c)の意と考えられなくてもないが、文脈上、浮舟は、恐ろしい話を耳にして生きた心地もしないほどの衝撃を受けていると判断されるので、(b)の意で理解するのが妥当ではないかと考える。

ただし、池田龜鑑『源氏物語大成 校異篇』（中央公論社）によれば、「心もきも」の部分「心きも」の部分が「心きも」となっている伝本が、青表紙本系統で三本、河内本系統で五本、別本系統で四本存していることから、用例⑥を「肝ツブル」の確例とするにはいささか躊躇される。

とは言え、たとえ『源氏物語』の例が本来「心肝ツブル」であったとしても、「肝ヲツプス」との形態上・意味上の類似性は否定しがたく、したがって、「肝ヲツプス」の前身として「肝ツブル」という自動詞句の存在を想定することに、大過はあるまいと思う。

## 六 「魂消ユ」と「魂ヲ消ス」

「魂ヲ消ス」は、平安時代には、『菅家文章』（二例）『本朝文粹』（五例）『藤原師通願文』（二例）『平安遺文』所収『新撰朗詠集』（二例）といった漢詩文類に用いられ、鎌倉時代には、いわゆる『和漢混淆文』の『海道記』（二例）や変体漢文の『吾妻鏡』（九例）に用いられている。なお、『海道記』には、対句を多用するなど漢詩文の影響が認められる。

次に用例を列挙するが、『本朝文粹』と『吾妻鏡』については三例ずつ掲げている。

- ① 酷悲穿眼復消魂（酷だ悲しびて眼を穿ち復魂を消つ）（『菅家文章』巻第一、「哭菅外史」、奉寄安著作郎」、大系一四〇④）

- ② 勸道諸生空赧面（勸め道ふ諸生空しく面を赧めむより） 從公万死欲銷魂（公に従ひて万死魂を銷さまく欲りせよ）

（『菅家文章』巻第二、「講書之後、戲寄諸進士」、大系・一七二②）

- ③ 老者少遺日、弱者有余年。懸車不幾、看形骸而揮淚、携杖在近、計年曆以銷魂（魂を銷す）。（『本朝文粹』巻第六、奏状中、平兼盛「申遠江駿河守等」状一首）

- ④ 豈図二月十二日中夜、機縁新滅、花界駕催。留而銷魂（魂を銷す）者、皆是緇門之遺弟、仰而恋恩者、寧非丹

中世における動詞句の変遷に関する一考察

擣之旧臣」。(『本朝文粹』卷第十四、願文下、菅相公「円融院四十九日御願文一首」)

⑤抑追<sub>二</sub>思往事<sub>一</sub>、触<sub>レ</sub>類消<sub>レ</sub>魂<sub>レ</sub>魂<sub>レ</sub>を消<sub>ス</sub>。(中略)草木愁色、沉於<sub>二</sub>蘭省梨園<sub>一</sub>乎。鳥獸哀声、沉於<sub>二</sub>虎闥鳳閣<sub>一</sub>乎。(『本朝文粹』卷第十四、願文下、江匡衡「一条院四十九日御願文一首」)

⑥十旬之齋戒將盈、余趁南山(大和金峯山)靈囀之神秀、奉礼金剛藏王之聖跡、絶頂万尋、踏秋雲而失歩、長坂九折、揮炎汗而消魂、不願進退之惟谷、只仰冥助之不空而已、(筒井英俊氏所藏文書、藤原師通願文、寛治二年七月二十七日)

⑦山月東昇 指前程而勞思 辺雲秋冷 問後会而消魂

錢奥州刺史赴任 敦宗「新撰朗詠集」、下雜、饒別、五九六、藤原敦宗

⑧その身に従ふ者は甲冑のつはもの、心を一騎の客にかく。その目に立つ者は劍戟の刃、魂を寸神の胸に消す。

〔海道記〕、総索引・〔四〇〕7)

⑨昨日梟首之間。拾<sub>二</sub>主君遺骨<sub>一</sub>。販洛之由荅。浮生之悲非<sub>二</sub>他上<sub>一</sub>。弥消<sub>レ</sub>魂。(『吾妻鏡』第二十五、承久三年七月十三日条)

⑩當時京中。群盜乱<sub>二</sub>入所處<sub>一</sub>。尊卑爲<sub>レ</sub>之莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>魂。(『吾妻鏡』第七、文治三年八月十二日条)

⑪自<sub>二</sub>去夜<sub>一</sub>雨降。辰時。雷鳴數聲。驚<sub>レ</sub>耳銷<sub>レ</sub>魂<sub>レ</sub>魂<sub>レ</sub>。云々。(『吾妻鏡』第二十七、寛喜元年十二月四日条)

①は、菅外史なる人物が、その才能と努力にもかかわらず、しかるべき官位につくこともなく命を終えてしまったことを悲しんだ詩において用いられた例である。この場合の「消魂」とは、菅外史の不遇な人生に対して、悲しみのあまり意気消沈しているさまを表していると考えられることから、(a)の意であると見られる。②は、自分(菅原道真)が文章博士になれたのは、勉学に専心したためであることから、書生たちにも、決死の覚悟で努力することを求めるといった文脈である。すなわち、「欲銷魂」とは、へ魂が体から抜け出て身に添わぬくらい、命がけで努力してもらいたい)の意と考えられるため、(a)(b)(c)のいずれの意にも当てはまらない例ということになる。③は、年老いた者は若者と違って、官職について仕事をする時間も残り少ないため、己の形骸を顧みては涙を流し、年数を数えては意気消沈す

るばかりであるとの文意と考えられ、(a)の意で用いられたものと見られる。④は、円融院の崩御に際して、仏門の遺弟は悲しみのあまり意気消沈し、宮仕の旧臣は恩を恋うて嘆くばかりであるとの文意と考えられ、やはり(a)の意で用いられたものと見られる。⑤は、一条院の存命であったころのことを思い出しては気持ち沈んでしまうの意と考えられ、これも(a)の意の例と認められよう。⑥は、金剛藏王の聖跡を巡礼するために道なき道を訪ね歩き、その厳しい道のりに、火の出るような汗が吹き出し精魂も尽き果てるばかりであったとの文意と考えられ、したがって、(a)(b)(c)のいずれの意にも当てはまらない例ということになる。⑦は、奥州刺史として赴任する人との別れを惜しむ詩において用いられた例であり、「消魂」とはへ悲しみのあまり心が消え入りそうであるの意(a)の意と見られる。⑧は、承久の乱で幕府に捕えられた中納言藤原宗行が、甲冑に身を固めた武士に拘束されて鎌倉へ送られる中、剣や戟の刃を目にしては生きた心地がせず我を失ってしまいそうであるとの文意(b)の意と考えられようか。とすれば、これは、「魂ヲ消ス」が(b)の意で用いられた最初の例ということになる。⑨は、中納言藤原宗行が、鎌倉へ護送される途中(⑧と同じ場面)、主君の遺骨を拾って都に帰るところだということになる。⑩は、京中に群盗が出没し、身分の上下にかかわらず恐れおののかない者はいなかったの意、また⑪は、雷の音におののいている場面であるから、ともに(b)の意で用いられたものと認められる。

右のように、平安時代の漢詩文では、用例②⑥のように(a)(b)(c)のいずれの意味にも当てはまらない例もあるにはあるが、基本的には、(a)の意で用いられていると認められよう(『本朝文粹』の残りの二例も(a)の意である)。それに対して、鎌倉時代の和漢混雑文や変体漢文では、(a)の意でも用いられているが、(b)の意で用いられることの方が多くなっている(『吾妻鏡』の残りの六例の内訳は、(a)の意二例、(b)の意四例である)。このことは、「魂ヲ消ス」の使用される文体が多様になるに伴って、意味範囲が拡大している状況を示していると考えられる。右のような使用状況は、延慶

本『平家物語』において、漢文中では(a)の意の例が用いられ、それ以外の仮名交じり文の部分では主として(b)の意の例が用いられていることにも見られたところである(第三項参照)。

一方、「魂消ユ」は、初出は『凌雲集』(一例)であり、同じ漢詩文集の『本朝文粹』(二例)にも用いられている。また、平安時代からすでに、漢詩文以外の『うつほ物語』(二例)、『三宝絵』(一例)、『浜松中納言物語』(一例)といった仮名(交り)文にも用いられており、鎌倉時代には、『海道記』(二例)に用例が見られる。

ただし、これらの仮名(交り)文のうち『浜松中納言物語』(5)以外は、漢文や漢文訓読語の影響が認められるものであり、(6)純粹な和文とは言えない点に注意する必要がある。すなわち、これらの仮名(交り)文における「魂消ユ」の使用は、漢文の影響によるものとも考えられる。

①風途飛葉散 雲路別魂銷(「凌雲集」)、「留別故人」)

②其余我而非我、泥之又泥也。或魂銷(魂<sub>シ</sub> 銷<sub>ヘ</sub>) 心迷、尸居不驚。或古結語戻、鳥囀難弁。(『本朝文粹』卷第十

二、記、紀納言「亭子院賜飲記一首」)

③いづれとなく、あたりさへ輝くやうに見ゆるに、魂も消え惑ひて、物もおぼえず、「あやしく、清らなる顔かたちかな」と、心地空なり。(『うつほ物語』、「嵯峨の院」、全・一九二⑧)

④左大将のおとど、春宮大夫にもものし給ふを辞し給ふ表作らせ給ふとて、召して、南のおとどしつらはせて、候はせ給ふ。(中略)御表作り果てて、しばし候ふに、魂消え惑ひ、炎も見ゆる心地す。(『うつほ物語』、「菊の宴」、全・三二六②)

⑤吾ガ子ハ只君也。常ニ見ルニダニ猶不飽ズ。遙ニ可遷シト聞シヨリ、神ヒキエテ心失ニタリ。(観智院本『三宝絵』上、

ハ十二 須太那太子、新大系・五二⑩)

⑥「見し夢は、かうにこそ」とおぼし合はするにも、いとゞかきくらし、たましる消ゆる心ちして、涙にうきしづみ

給けり。(『浜松中納言物語』巻の五、大系・四四〇⑦)

⑦さてもこの歌の心を尋ぬれば、納言、浮島が原を過ぐるとて、物を肩にかけて上る者あひたりけり。問へば按察使光親卿の僮僕、主君の遺骨を拾ひて都に帰ると泣く泣くいひけり。それを見るは身の上の事なれば、魂は生きてよ  
りさこそは消えにけめ。(『海道記』、総索引・(六三) 5)

①は、故人との別れを惜しむ詩中の例であり、(a)の意で用いられたものと見られる。②は、宴席で泥酔して氣を失っているさまを表現したものと考えられることから、(a)(b)(c)のいずれの意にも当てはまらない例と見られる。③は、仲頼が、賭弓の饗宴の折、母屋に並み居る女君たちをのぞき見て、その輝くばかりの美しさに茫然としている場面であり、(a)の意を表しているものと見られる。④は、左大臣が藤英に辞表を作らせ、藤英が作り終えて待つている間中、あて宮のことを思つて心が乱れている様子を表していると見られる。(a)(b)(c)のいずれの意とも微妙に異なっているようにも思われるが、強いて言えば、(a)に近い意で用いられているとも考えられる。⑤は、折波羅國の須太那太子が、賊に謀られて、国を守るべき象を賊に与えてしまったために、国を追放されることになり、太子の母親が嘆き悲しんでいる場面である。息子(太子)の追放の知らせを聞いた母親が、悲しみのあまり心が消え入りそうになったの意と考えられ、(a)の意の例と認められよう。⑥は、唐后の死の知らせに接した中納言が、悲しみにくれている場面であつて、やはり、(a)の意で用いられた例と認められる。⑦は、「魂ヲ消ス」の用例⑨と同一の場面・文脈であると見なされることから、(b)の意の例と見られる。

右に見るように、「魂ヲ消ス」「魂消ユ」は、漢文ないし漢文の影響の見られる文章中に用いられる傾向が認められるが、このことは、両者が中国漢文を出自とする表現であることに起因していると考えられる。

○黯然銷魂者、唯別而已矣。況秦吳兮絶国、復燕宋兮千里。(『文選』、江文通「別賦一首」)

○不指銅駝而、皆裂望玉壘、以魂銷。(『旧唐書』、列伝第二百二十八「鄭畋」)

とすれば、他の動詞句（「肝ヲ消ス」「肝ヲツプス」）の場合のように、他動詞句形の「魂ヲ消ス」が自動詞句形の「魂消ユ」から派生したとは言えないことになる。ただし、自動詞句形の「魂消ユ」が仮名（交り）文にも少なからず用いられている点については、同じ自動詞句形の「肝消ユ」「肝ツプル」の場合と同様であり、このことから、自動詞句形は他動詞句形にくらべて、仮名（交り）文に用いられる傾向があると言えそうである。

ところで、先に見た「魂消ユ」の用例⑦（『海道記』）と「魂ヲ消ス」の用例⑨（『吾妻鏡』）とは、同一の原拠に基づいている可能性があると思われるが、それが事実とすれば、『海道記』や『吾妻鏡』よりも前に、「魂消ユ」または「魂ヲ消ス」に（b）の意が生じていたことになる。その原拠の文体が仮名交り文（和漢混淆文）であるか変体漢文であるか不明なのが惜しまれるが、いずれにせよ、正格漢文でないことは確かであろう。このように、中国漢文を出自とする動詞句が、変体漢文や和漢混淆文といった、漢文の日本の変容を遂げた文体の中で意味変化を起こしていると見られることについては、動詞句の意味と文体との相関性を示す事例として注意しておいて良いと思われる。

#### 七 まとめ——「肝ヲ消ス」の成立——

以上、延慶本『平家物語』までの諸文献における「肝消ユ」「肝ヲ消ス」・「肝ツプル」「肝ヲツプス」・「魂消ユ」「魂ヲ消ス」を対象として、自動詞句形と他動詞句形の使用状況を比較しながら、その先後関係や意味関係について検討を加えた（表①参照）。

その結果、「肝ヲ消ス」と「肝ヲツプス」については、自動詞句形の「肝消ユ」「肝ツプル」が先行して用いられており、それらを母体として、他動詞句形の「肝ヲ消ス」「肝ヲツプス」が派生的に生じたと考えられた。また、「魂ヲ消ス」については、自動詞句形の「魂消ユ」の方が先行して用いられているとは必ずしも言いがたく（初出は、「魂消ユ」が『凌雲集』、「魂ヲ消ス」が『菅家文章』であって、どちらも平安初期であることから、ほぼ同時期と見なし得る）、しかも、

(表①)

文献名	表現・用法			キモ(肝)			タマシヒ(魂)		
	a	b	c	a	b	c	a	b	c
凌雲集									
竹取物語									
菅家文章									
うつほ物語									
三宝絵(観智院本)									
古今和歌六帖									
源氏物語		1							
本朝文粹									
浜松中納言物語					1			1	
(平安遺文)						1			
今昔物語集									
新撰朗詠集									
宝物集(書陵部本)									
海道記				1					
十訓抄									

中世における動詞句の変遷に関する一考察



代には、「肝ヲツプス」とともに「肝ヲ消ス」が(c)の意味でも用いられている。

以上のことをふまえて、最初に提起した「肝ヲ消ス」の成立の問題に立ち返って考察し、本稿のまとめとしたい。

すでに述べたように、「肝ヲ消ス」は「肝消ユ」を母体として派生的に生じた句形であると思われるものの、両者の使用時期の間におよそ二百年もの空白期間があることから、「肝ヲ消ス」の成立には、何らかのきっかけがあったのではないかと考えられた。表①によれば、「肝ヲ消ス」は、鎌倉時代の後期に突如として出現したように見受けられるが、「肝ヲ消ス」が現れる前に、「魂ヲ消ス」の意味範囲が拡大していることが注意される。すなわち、「魂ヲ消ス」は、平安時代には、もっぱら(a)の意で用いられていたが、鎌倉時代になると、和漢混淆文や変体漢文において(b)の意でも用いられるようになる。その結果、すでに、和漢混淆文において(b)の意を担っていた「肝ヲツプス」との間でコンタミネーション(混淆)が起こり、「肝ヲ消ス」が成立したと考えられるのではないだろうか。「肝ヲ消ス」が(b)だけでなく(a)や(c)の意でも用いられていることについては、「魂ヲ消ス」から(a)の意を、「肝ヲツプス」から(c)の意を受け継いだという説明が可能であろう。

このように、平安時代から存していた「肝消ユ」が、形態の上で「肝ヲ消ス」を生み出すベース(母体)となったことはもちろんであるが、同時に、「魂ヲ消ス」の意味範囲とその使用範囲(文体)の拡大が「肝ヲ消ス」を成立させるきっかけとなったのではないかと考える次第である。

## 八 おわりに

本稿では、「肝ヲ消ス」の成立をめぐる、その類義動詞句との関係について検討を加えた。今回の検討を通して、動詞句の形態・意味とそれが使用される文体との間に、密接な相関性の存することが見えてきたように思う。この点を、さまざまな動詞句における検討を通してより明確にすることができれば、動詞句の変遷をたどることによって、逆に、

文体の変遷の輪郭を描くことも、あるいは可能となるかもしれない。いずれにせよ、本稿において、日本語史研究(特に文体史研究)上、「句」という単位に注目することの有効性をいささかでも示すことができているならば、幸いである。

## 注

- (1) 拙稿「平安・鎌倉時代における類義動詞句『夜ヲ昼ニ成ス』と『夜ヲ日ニ繼グ』との交替について」(『徳島文理大学文学論叢』第十四号、一九九七年三月)、同「平安・鎌倉時代における〈剃髪〉を表す類義動詞句の変遷について」(『徳島文理大学文学論叢』第十五号、一九九八年三月)、同「中世における動詞句の成立に関する一考察——「メニアフ」の成立について」(『鎌倉時代語研究』第二十一輯、武蔵野書院、一九九八年五月)等。

- (2) 本文は、北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇 上・下』(勉誠社、平成二年六月)による。

- (3) 今回調査した文献は、次の通りである。(一)内は、本稿で引用した本文を示す。

## 〈漢字文献〉

古京遺文・続古京遺文・寧楽遺文・古事記・日本書紀・風土記・凌雲集(本間洋一編『凌雲集索引』和泉書院)・経国集・文華秀麗集・菅家文草(日本古典文学大系)・菅家後集・都氏文集・扶桑集・本朝麗藻・田氏家集・類題古詩・本朝文粹(新日本古典文学大系、訓点は久遠寺本による)・和漢朗詠集・新撰朗詠集(新編国歌大観)・貞信公記・九曆・小右記・権記・御堂関白記・後二条師通記・平安遺文(CD-ROM版『平安遺文』東京堂出版)・日本霊異記・日本往生極楽記・法華験記・後拾遺往生伝・注好選・玉造小町壮衰書・高山寺本古往来・和泉往来・雲州往来・吾妻鏡(新訂増補国史大系)

## 〈仮名(交り)文献〉

万葉集・古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・古今和歌六帖(新編国歌大観)・竹取物語(新日本古典文学大系)・うつほ物語(室城秀之『うつほ物語 全』おうふう)・落窪物語・多武峯少将物語・源氏物語(源氏物語大成)・夜の寝覚・浜松中納言物語(日本古典文学大系)・狭衣物語・篁物語・とりかへばや物語・松浦宮物語・堤中納言物語・伊勢物語・大和物語・平中物語・土左日記・かげろふ日記・和泉式部日記・紫式部日

記・更級日記・讃岐典侍日記・たまきはる・中務内侍日記・十六夜日記・枕草子・栄花物語・大鏡・今鏡・水鏡・三宝絵（新日本古典文学大系）・法華百座聞書抄・打聞集・今昔物語集（日本古典文学大系）・宝物集（古典籍索引叢書⑥、汲古書院）・金沢文庫本仏教説話集・江談抄・古本説話集・宇治拾遺物語・閑居友・発心集・十訓抄（泉基博編『十訓抄本文と索引』笠間書院・保元物語（日本古典文学大系）・平治物語・東関紀行・海道記（鈴木一彦・猿田知之・中山緑朗共編『海道記総索引』明治書院）

- (4) 三巻本（黒川本）『色葉字類抄』には、「タマシイ<sup>⑤</sup>」を表記する漢字として、順に「魂」「魄」「神」の三字が掲出されている。
- (5) 『浜松中納言物語』は、一般的には、純粹な和文であると考えられていると思われるが、仏教用語が多用されている（稻賀敬二「寢覚・浜松の位置——位置づけの前提条件の一考察——」『国語と国文学』三十六巻三号・一九五九年四月）ほか、動詞句レベルで見た場合、たとえば、漢文の「流涙」に基づく「涙を流す」が少なからず用いられている（小林澄子「古代における『涙』をめぐる動詞について」『文芸研究（日本文芸研究会）』百六・一九八五年五月）など、漢文に由来する表現が少なくないことから、少なくとも表現レベルでは（文体レベルはともかく）、漢文の影響がないとは言えない。

- (6) 『うつほ物語』については、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（一九六三年、東京大学出版会）の第六章「仮名文学と漢文訓読」第一節「総説」はじめ、同書の随所に、『うつほ物語』における漢文訓読語の使用例の指摘がある。『三三三絵』については、山田孝雄『三三三絵略注』（一九五一年、宝文館）、小泉弘・高橋伸幸『諸本対照 三三三絵集成』（一九八〇年、笠間書院）等により、『三三三絵』の文章全体が仏書類の典故を背景として成り立っていることが知られる。『海道記』については、日本古典全書『海道記 東関紀行 十六夜日記』（一九五一年、朝日新聞社）の解説（玉井幸助）、松井栄一「海道記に及ぼせる四六文の影響——字法・対偶法を中心として——」（『国語と国文学』三十巻七号、一九五三年）、江口正弘『海道記の研究 本文篇 研究篇』（一九七九年、笠間書院 第三章「海道記の語彙」等）により、対句表現をはじめとして四六駢儷文の影響が色濃く見られること、漢文訓読語と和文語との使用比率が六対四ぐらいで訓読語が多く用いられていることなどが明らかにされている。

〔付記〕平成十一年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会（八月十一日・十二日、広島大学）では、本稿の第六節の「魂ヲ消ス」について部分を口頭発表した。